

麒麟ホールディングス におけるR&D変革の全貌

AIエージェント導入がもたらす「思考の連続性」と新たな研究スタイル

[CASE STUDY & STRATEGIC ANALYSIS]

EXECUTIVE SUMMARY



課題

研究現場における
「思考の分断」

従来のAI導入は「部分的な業務効率化」に留まり、都度のツール起動や検索作業が研究者の高度な思考プロセスを物理的・認知的に分断していた。



解決策

思考に寄り添う
「AIネイティブな研究環境」

AIをツールとしてではなく「伴走者」として研究フローに常時組み込む。仮説形成から知見共有までを一体的に支援し、2026年より本格運用を開始。



展望

「問いを立てる力」の
極大化へ

試行錯誤の過程を組織知として蓄積し、研究者が人間の本質的価値である「批判的思考」と「独自の課題設定」に専念できる体制を構築する。

KIRIN Digital Vision 2035: AIエコシステムの全体像

全社共通業務

BuddyAI & Microsoft 365 Copilot

国内従業員約1.5万人対象 / 利用率約70%。年間約31万時間の定型業務削減を見込む。M365 Copilotは半年で6,000人超へ展開。

専門部門

ChatGPT Enterprise

企画・R&D・マーケティング等、高度なテキスト解析や企画立案を要する部門へ限定導入。

経営意思決定

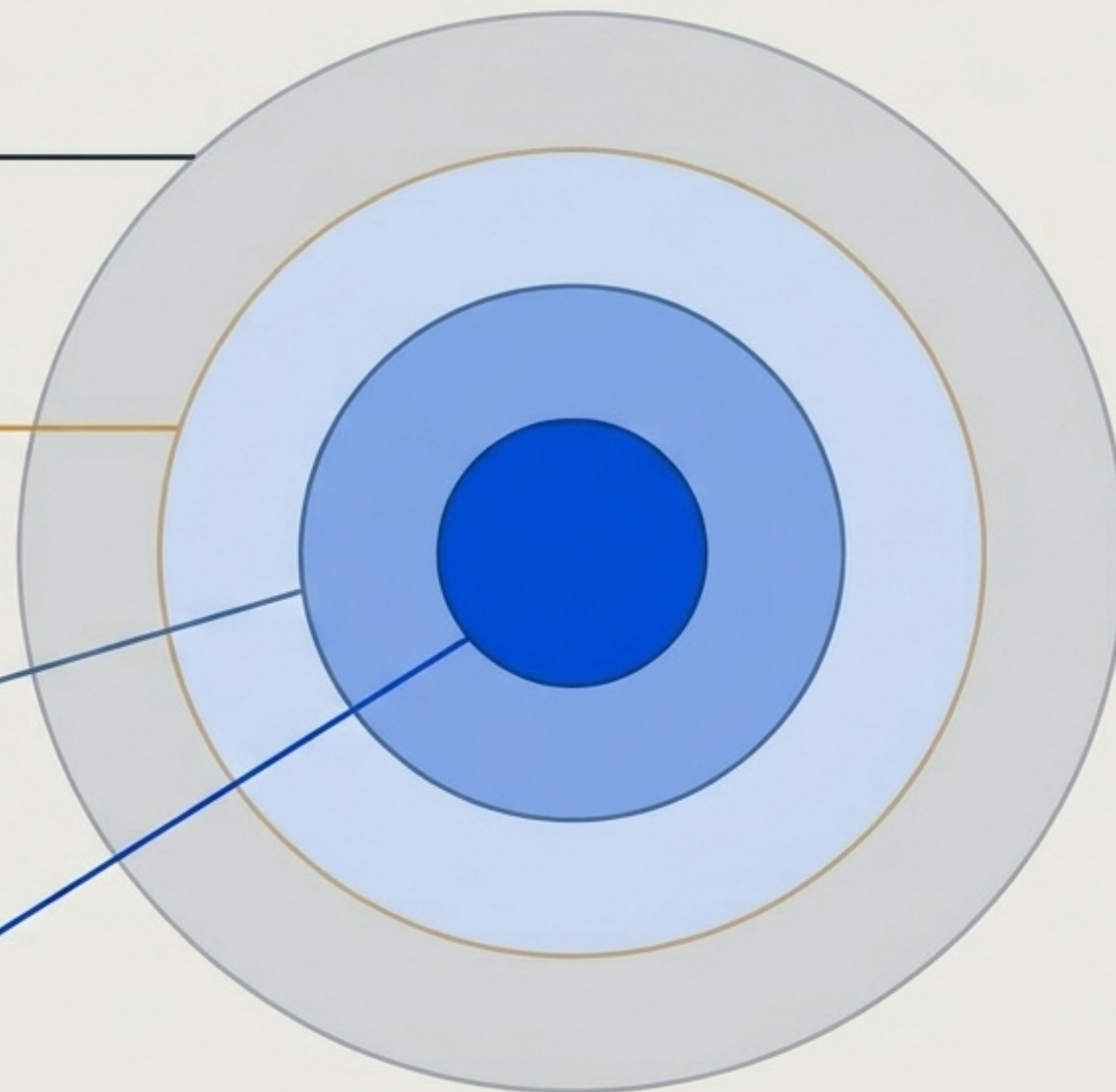
AI役員「CoreMate」

過去10年分の議事録を学習した12のAIペルソナが経営戦略会議で多角的な視点を提供。

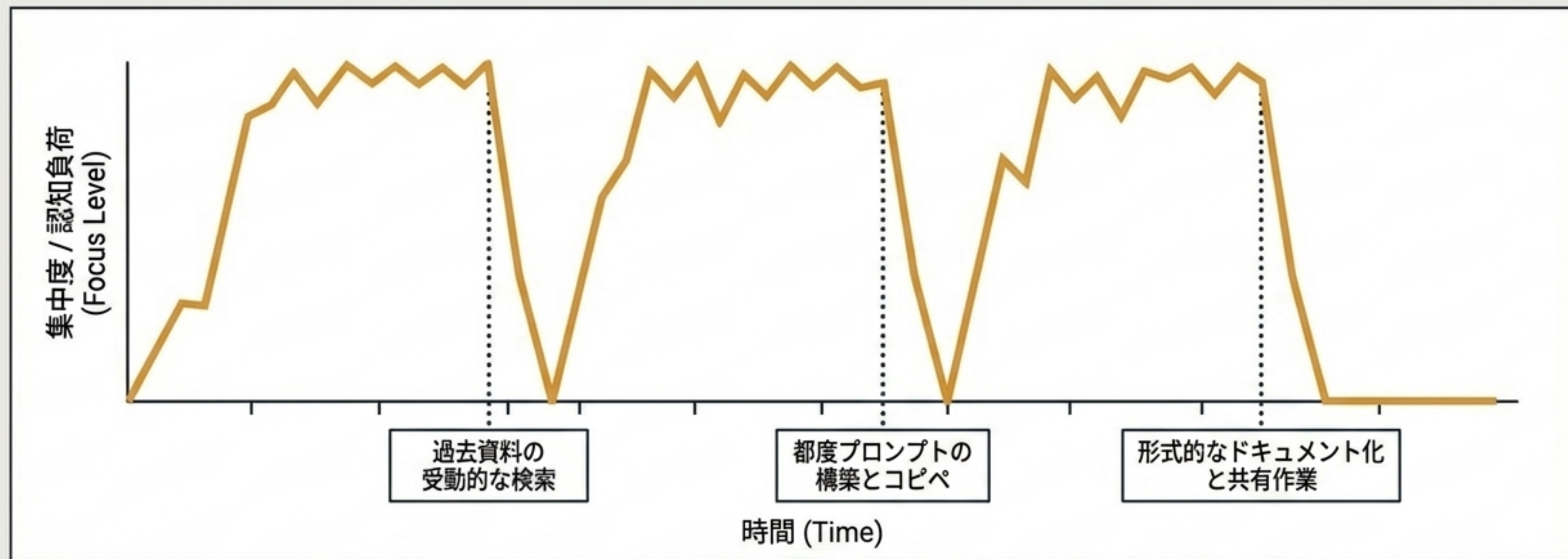
高度研究開発

AI Research Agent / R&D組み込み型AI

創薬・ヘルスサイエンス領域における科学文献と社内データの統合・仮説創出。「KIRIN Digital Vision 2035」の価値創造を牽引。



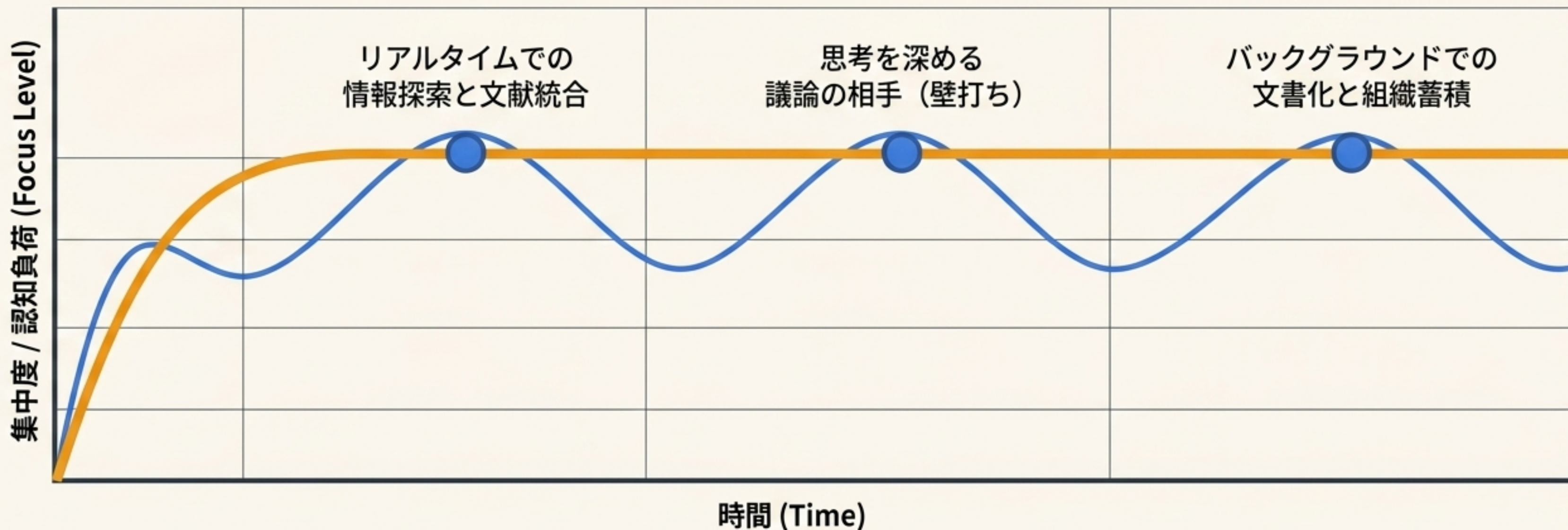
課題：従来型研究プロセスにおける「思考の分断」



汎用生成AI（都度起動型）の限界

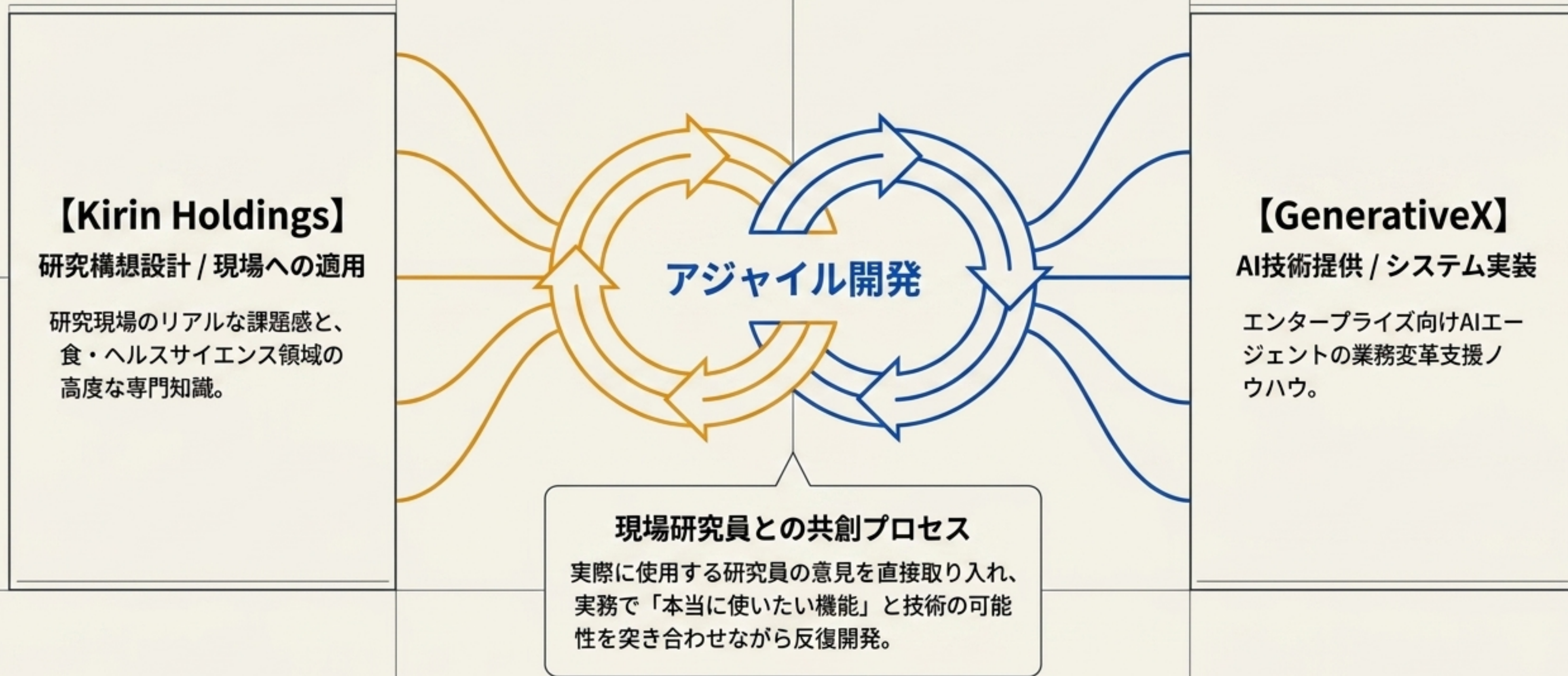
ツールを起動・指示する行為自体が「思考の波」を阻害し、創造的活動への集中を奪っている。

解決策：AIネイティブな研究環境



「都度起動型」から「常時存在型」へ
研究フローの背後でAIが常に伴走し、研究者は高度な思考の連続性を維持できる。

開発体制：アジャイルな共創アプローチ



パラダイムシフト：研究支援スタイルの比較

	従来型	汎用生成AI	今回の支援スタイル
利用形態	受動的なデータベース検索	対話ウィンドウに都度プロンプト入力	研究フロー内にAIを組み込み常時存在
思考の連続性	検索・抽出のたびに作業が分断	プロンプト構築とコピペで思考が中断	思考を止めない 一体型リアルタイム支援
知見の共有	完成されたレポート・資料のみ保存	個人の対話履歴として非共有化	仮説・議論・探索履歴を組織で蓄積・活用
AIの役割定義	単なるデータ検索システム	タスク代行・定型文作成ツール	研究者の創造性を引き出す伴走者

AIエージェントを構成する4つの柱



フローへの組み込み

アプリの立ち上げ不要。
研究活動の自然な導線の中
にAIがビルトインされ
たインターフェース。



リアルタイム支援

仮説形成から情報探索、
壁打ち、ドキュメント化
まで、思考の波に合わせて
シームレスに機能。



伴走者としての設計

人間を代替するのではなく、
研究者が主役となり、その
創造性と直感を引き出す
ための設計思想。



共創知への昇華

個人の頭の中に留まっ
ていた思考プロセスや探
索履歴をシステムに蓄積
し、組織全体の共有資
産へ変換。

業界動向と独自の競争優位性

業界動向：R&D変革の現在地



- 味の素やGENIAC等に見られる、データ「AI Ready化」と「暗黙知の言語化」の加速。
- 個別業務の効率化と自社データの活用基盤構築が主流。

キリンの優位性：異分野クロスオーバー



多様な事業ポートフォリオの知見結合。AI伴走により蓄積された各領域の「思考・探索履歴」を共有可能にすることで、通常は交わらない異分野間の技術的クロスオーバー（偶発的結合）を誘発する特異な環境。

R&D特有のAIリスクとガバナンス（1/2）

認知的リスク

ハルシネーションと「思考の均質化」

精密なエビデンスが命であるR&Dにおいて、AIの誤謬はリソース浪費に直結。また、AIの最適解に依存しすぎると、非論理的な着想や「セレンディピティ（偶然の発見）」が失われ、思考が均質化する懸念。

- ✓ 対策: 人間によるファクトチェックの徹底と、泥臭い直感を排除しないインターフェース設計。

法務・知財 リスク

発明者認定と権利帰属

日本の特許法上、発明者は「自然人」に限られる。将来的な特許出願において、AIではなく「人間が創作的にどう寄与したか」を証明する必要がある。

- ✓ 対策: 仮説形成・実験設計・技術的判断などの「人間の貢献プロセス」を適切に記録・トラッキングするガバナンス体制の構築。

R&D特有のAIリスクとガバナンス（2/2）

データインフラ

「暗黙知」のAI Ready化とデータ品質

食品・ヘルスサイエンス特有の官能評価（味、香り、食感）や、熟練研究者の微細な「加減」は構造化が極めて困難。参照データが整備されていなければ、AIの示唆精度は頭打ちになる。

- ✓ 対策：結論だけでなく「試行錯誤のプロセス」自体を言語化し、質の高いコンテキストとして蓄積する仕組み。

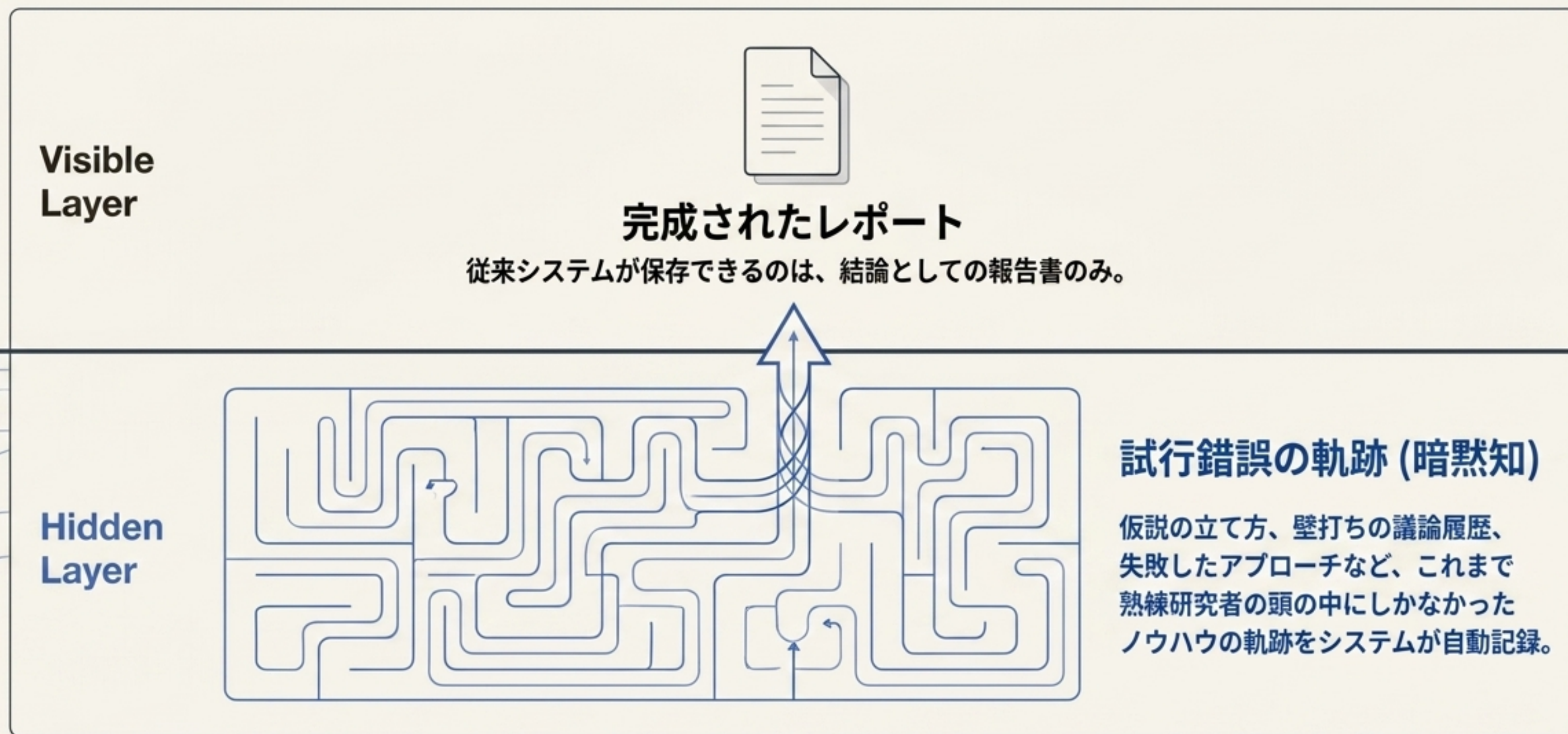
運用・ ガバナンス

常時稼働による運用コストとパートナー依存

バックグラウンドでコンテキストを常時追跡・処理する設計は、都度起動型と比較してトークン消費や演算コストが肥大化しやすい。

- ✓ 対策：外部パートナーとの適切な役割分担、将来的な内製化のロードマップ、および知財・データ帰属の厳密な管理。

本質的価値：「試行錯誤プロセス」の構造化



結論ではなく「思考のプロセス」自体を組織の資産へ変換する。

AIエージェントの 将来ロードマップ

2026
Launch

専門性の個別最適化学習

研究者個人の専門領域や特定テーマの深いコンテキストを学習し、個別化された示唆を提供するパーソナライズ機能の拡充。

自律的提案と兆候検知

研究者の指示を待たず、AI側から自律的な仮説の提案や、データ内の微細な「課題の兆候」を検知してプッシュ通知する機能。

グループ横断展開

一部研究所での運用成果をベースに、キリングroup全体のR&D部門、さらに異なる事業領域間での連携促進プラットフォームへと拡大。

批判的思考力
問いを立てる力
[人間の領域]

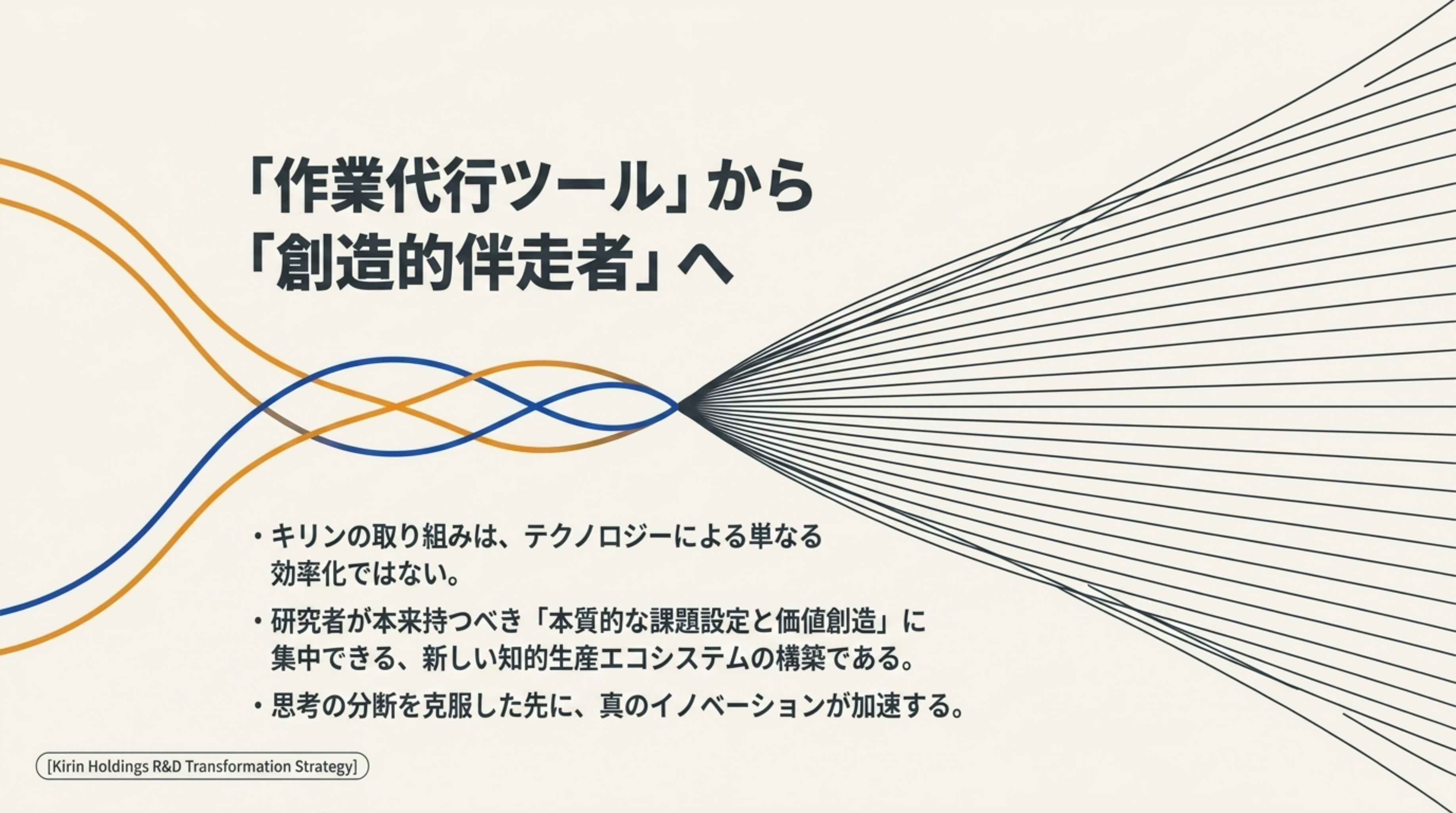
イノベーションの究極の差別化要因

AIが情報処理の負担をゼロに近づける中で、AIの示唆を鵜呑みにせず
検証する「批判的思考力」と、未知の領域に対して本質的な「問い
問いを立てる力」こそが、人間の持つ最大の価値となる。

AIは研究者を代替するのではなく、
研究者を「科学の戦略的ディレクター」へと押し上げる。

情報の収集・整理・統合
[AIの領域]

「作業代行ツール」から 「創造的伴走者」へ



- キリンの取り組みは、テクノロジーによる単なる効率化ではない。
- 研究者が本来持つべき「本質的な課題設定と価値創造」に集中できる、新しい知的生産エコシステムの構築である。
- 思考の分断を克服した先に、真のイノベーションが加速する。